



横浜市立桂小学校

桂小だより

KATSURA NEWS LETTER

2月号

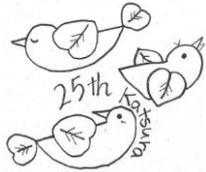
令和3年1月29日

Web: <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/katsura/>

学校についての詳細や学校生活についてはHPをご覧ください。

E-mail: y3katura@edu.city.yokohama.jp

桂小学校HPのQRコードはこちら→



見本と手本

校長 寺澤 みゆき

国語（書写）の学習として、本校でも「書き初め」を行っています。今年は気候の関係で体育館での学習を中止した学年もありましたが、毎年行うことで学校の年末年始の風物詩のひとつとなっています。

あるクラスの書き初めの授業を参観していたところ、子どもが、教材文字のことを「見本」と称している場面に出会いました。私は、反射的にその子に、「見本じゃなくて、お手本だよ。」と伝えました。うん、と頷きながらも、その子は首を傾げ腑に落ちない表情でいましたが、授業中ということもあり私も詳しい説明をせずそのまま、その場を立ち去ってしまいました。

教材文字は「見本」じゃないんだよ。お手本なんだよ。あの子に「見本」と「手本」の違いを教えるなら、どんな言葉で伝えたらいいのかな、と考えながら戻り、まずは国語辞典で意味を調べてみることにしました。

『【見本】全体の質や状態を推し測らせるために、その中から取り出して示す一部分のもの。転じて、代表的な例。』

『【手本】書画の練習の模範とする書画がかいてある本。模範。また、標準となる様式。』

（岩波国語辞典より）

言葉としての意味は確かにその通りなのですが、子どもに伝えたいことはちょっと違う気がします。そこで、同様の意味での「手」を使ったことわざなどを確認してみました。「手のこんだ細工」「手を入れる」「手を尽くす」など、「手」を使用した言葉はたくさんあります。これらに共通していることは、「手」とは体の部位を示しているのではなく、人の行動や営みを表していることです。ここまで来て、腑に落ちました。教材文字が「見本」ではなく「お手本」であるのは、字の形を教え込む教材ではないからなのだ、と今更ですがはっきり分かりました。

始筆・終筆の角度と力加減や送筆の速度、画と画の関係などをその文字の形から読み取り、結果として「整った字形」をつくり出す、見る（読む）人を意識して読みやすいよう丁寧に書くといった、人の手の動きや間合い、書く時の心構えを学びとる教材だから「手本」なのだと理解しました。

どんなに形が整っていても、枠線を写し、墨で塗りつぶした作品に心打たれることはありません。また、整ったフォントのパソコン文字を見て読みやすさ、分かりやすさは感じますが、パソコン文字に感動を覚える人は少ないと思います。書字の美しさは人の営みの美しさだと思えると、書写の教材文字はやはり「手本」なのです。

学校教育の中で、「6年生は全校児童のお手本になるように」「2年生は1年生のお手本です」等、「手本」という言葉をよく使います。「全校児童の見本になるように」とは使いません。これも、ある場面だけ体裁を繕ってよい格好を見せなさいという意味ではなく、日頃からの所作や心構えなどが、下の学年への模範であってほしいという期待を込めて子どもに投げかけています。

さて、私たち大人は子どものよい手本になっているのでしょうか。規範意識や思いやりを、子どもは言葉や理屈で学ぶのではなく、身近な大人を手本として学んでいきます。子どもに「教える」だけでなく、自分の行動や心構えを振り返り、子どもの手本となるように改めていきたいと思いました。

保護者並びに地域の皆様、今後とも本校の教育活動へのご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。